

連載 千座の置き戸（ちくらのおきど）

第二百五十九回 マルクス・レーニン思想の破綻（その九）

南出喜久治（令和7年元旦記す）

【マルクス主義の本質 その5】

少し前に、斎藤幸平が「資本論」についての著作を出してゐる。令和3年1月に、NHKの100分de名著で「カール・マルクス 資本論」から始まったものである。

この斎藤が説くのは、一言で言へば、「非共産マルクス主義」である。

昭和40年代までは、共産主義といふのはML（マルクス・レーニン）主義であつて、マルクスとレーニンは不可分のものとされ、これが共産主義運動の主流であつた。共産主義といふのは、当時はML主義を意味してゐた。

ところが、「レーニンから疑へ」といふ論調が生まれ、マルクスとレーニンを切り離して、レーニン主義が共産主義であるとの認識により、それから離れて、「非共産マルクス主義」といふ理念が説かれたことがある。

これが今頃になつて斎藤の口によつて現在に蘇つただけで、昔を知る人からすれば、特段何ら目新しいものではない。

政治家レーニンには思想家として政治家として、貨幣の廃止をしなかつたといふ致命的な欠陥があつた。

それによつて、マルクスの思想が歪められることを避け、マルクスの分析の正しさを強調するのが「非共産マルクス主義」である。

貨幣の廃止をしなかつたことについては、非共産マルクス主義を唱へるものは、これまでこのことを一度も指摘したことがなかつた。

斎藤が今年出版した『ゼロからの「資本論」』の中の第5章に、「グッバイ・レーニン！」とあつたので、まさか、と思つて買つて読んでみたが、何も書かれてゐない。欺された。期待する方が愚かであつた。

ともあれ、レーニンによるロシア革命は、マルクスのプロレタリアート独裁といふ革命に不可欠であるとする政治形態に基づくものであつて、共産独裁政権に正当性を与へるも

のであつた。

権力からは何も生まれないとしながら、権力によつて政治改革を主導するといふのは大いなる矛盾である。

この権力がなければロシア革命は成り立たない。非共産マルクス主義と雖も、プロレタリアート独裁を否定することはできないのであるが、これをも否定しようとしたのが「非共産マルクス主義」の主張であつた。

あのころも今も、プロレタリアート「独裁」といふ言葉に拒絶反応を起こし、これを否定したマルクス主義で社会変革しようといふお花畑のご都合主義者が居る。当時は、暴力革命に抵抗があつた社民思想の者の多くがこれに共鳴した。日本共産党は、プロレタリアート「独裁」といふ言葉を、プロレタリアート「執政」と言ひ換へたことがあるほど、「独裁」といふ言葉は不人気だつたのである。

しかし、ローマにおけるシーザーへの「委任独裁」、ワイマール憲法下でのナチス政権への「授權独裁」といふ合法的な独裁もあるので、「独裁」といふ言葉自体に批判的なのは、独裁といふ言葉には、どうしても非合法、暴力的なイメージがつきまとふからである。

そして、この非共産マルクス主義の思想的潮流が我が国では「社共共闘」を生み、結局は左派社会党が共産党に飲み込まれて、社会党は分裂し衰退し滅亡した。

支那でも、国民党と共産党が対日共闘として国共合作を行ひ、結局は共産党（八路軍）によつて国民党が弱体化したのと同様に、共産主義に利用されて衰退するといふのは「非共産マルクス主義」の歴史的宿命なのである。

その歴史的教訓から、いまや絶滅した考へだつたが、ゾンビのやうに斎藤が復活させた。そして、斎藤はマルクスを神格化して、マルクスの過誤については一切述べず、肝心なことについては嘘まで言つてゐる。まるでマルクス教である。

斎藤の狙ひは、非共産マルクス主義（修正マルクス主義）によつて、政界再編成を希望してゐるのかも知れないが、斎藤が単なる坊ちゃん学者であり行動しない者には全く政治力がないために、日本共産党からは完全に黙殺されてゐる。

また、日本共産党としても、周りを見ても共闘相手が居ない。いまや社会党は消滅し、社民党も絶滅危惧品種となつて利用価値がない。

残るは、立憲民主党であるが、ところが、日本共産党は、立憲民主党との共闘に大きな壁がある。

日本共産党も創価学会の公明党も高齢化による活動力、発展力が低下してゐる。

本当は、斎藤のやうに、素朴な若年層に対する影響力のある学者の力を切望してゐる筈だが、除名を連発する志位和夫の独裁体制が益々強化される状況では、斎藤を取り込むこ

とがむしろ災ひを呼び込むことになるために、排除、黙殺し続けるであらう。

いくらマルクスの分析が正しい方向にあると言つても、所詮、唯物論の域を出ない。
こんな唯物論による斎藤らの非共産マルクス主義者が説いたとしても、致命的な限界があるのである。